会津から世界へ-　グローバル化教育に携わって

於：在京会津高同窓会

平成 30 年 4 月 15 日

小澤 弘明（高 28 回）

私は会津から東京へ出て、ヨーロッパの近現代史を研究するようになりましたが、現在、故あって千葉大学の副学長として大学のグローバル化に力を尽くしております。大学はどう変わりつつあるのか、その点についていささかお話しをしたいと思います。

私の研究上の専門は中東欧の歴史です。ヨーロッパの中で、ドイツとロシアの狭間の地域と考えていただいて結構です。しかし、研究を続けるうちに広く世界の歴史にも関心を抱くようになり、ついには高等学校の世界史教科書を書くようになりました。そのため、研究だけでなく大学の教養教育に力を入れることになり、その結果、教育改革担当の副学長になったということです。

さて、日本の大学は人口減少・低成長時代の高等教育を担うという世界でも希な課題に直面しています。大学が倒産したり、吸収合併の噂が飛びかったり、という現状は、18 歳人口に比べて大学の数が多いからだと言われます。しかし、大学の数より重大な問題は、そもそも大学が社会の急速な変化に対応した人材を育成しているのか、社会にとって有用な研究教育を行っているのか、という厳しい声があることです。

日本の大学生は、世界で最も勉強しない大学生だと言われます。それには理由があるのです。大学生に対する社会的評価では、大学でどのようなことを勉強したのか（schooling）ではなく、どのような偏差値の大学を出たのか（screening）が重視されてきました。つまり、大学生は個人として評価されるのではなく、ある大学の出身者として評価され、大学は、どのような教育をしているか、ではなく、18 歳の時の入試の偏差値によって輪切りにされてきたのです。そのため、大学で勉強してきたことは社会では評価されない、ということになったのです。大学での努力は報われることはありませんでした。その結果、企業の教育は企業内で、企業の研究も企業内で進められていました。

しかし、長期化する不況と知識集約的な産業への構造変化によって、企業内研究は立ちゆかなくなり、終身雇用制がこわれつつあるために企業内教育も効率的ではなくなりました。そのため、大学の研究と社会、大学の教育と社会の関係をより密接なものにするという要請が生じてきたと言えるでしょう。現在のヒト・モノ・カネ・知のグローバル化の進行は、日本のどの地域にいても直接世界と結びつくという状況を生みだしているのです。

日本では４年ほど前からスーパーグローバル大学創成支援事業というものが始まり、私の勤務する千葉大学も採択されました。会津大学も、全教員の４割が外国籍であるという特徴を持ち、同じく採択されています。学生を留学に送り出し、海外体験を積ませるとともに、海外でのインターンシップやボランティアのプログラムを作り、学生につねに社会との関わりを意識してもらおうとしています。学生は、イオンのアセアン本社でインターンシップを行ったり、スリランカで井戸を掘るボランティア等を経験しています。また、海外キャンパスという形で海外に研究・教育の拠点を作り（千葉大学は米国のサンディエゴ、ドイツのベルリン、タイのバンコクの三カ所)、多数の大学と学生交流協定を結んでいます。

大学の中でも、留学生との協働授業を行ったり、留学生と日本人学生の混住寮を建設したり、ハラール食の提供などムスリム学生が暮らしやすい環境を作るようにしています。学生が英語に触れる機会を増やそうと、外国人教師と日常的に会話のできる「イングリッシュハウス」といった施設も作っています。

こうしたことは近年の日本の大学では珍しいことではなく、大学のグローバル化・国際化に向けて、多くの大学が取り組んでいるところです。学生の学修時間を延ばそうと、反転授業やアクティブラーニングといった新しい教育方法が試されてもいます。これに加えて、千葉大学では、2016 年に国際教養学部という国立大学で初の新しい学部を作り、大学全体のグローバル化を先導する役割を担ってもらおうとしています。私は、この千葉大学で 10 番目の学部の設置準備室長、次いで初代学部長として立ち上げに携わりました。

国際教養学部は、文系・理系という考え方をとらずに、世界で生じているさまざまな課題（グローバルイシュー)、たとえば、環境問題や難民問題、科学技術と社会との関係、などから出発して、ものごとを考えていこうとする学部です。学生は短期・長期を問わず、留学することが必須で、「現場で学ぶ、現場を学ぶ」「世界で学び、世界を学ぶ」をモットーとしています。学生がキャンパス外にいても学修する環境を得られるように、スマートフォンやタブレットでアクセスできる電子的な学修支援の仕組みを整備しています。CALL と呼ばれるコンピュータによる英語学習も、授業の資料やテストもオンラインで用意されます。留学中でも、インターネットを通じて千葉大の授業に参加できるように配慮しています。

このような大学や教育のグローバル化は、大学にとって必要だからというのではなく、これから学生が、世界で地球上のあちらこちらで活躍していく下地を作ろうという試みです。そうした活躍は日本の国内でもできます。日本のどの地域も世界と結び付いていない地域はないのですから、そこで活躍できる人材が必要です。大学のグローバル化というのは、単に英語のできる特徴のない

学生を育てることが目的なのではなく、つねに世界のことを考えながら「自分自身の足元を掘る」人間を育成することだと考えています。

教育は、成果がすぐには見えず、たいへん時間のかかるいとなみではありますが、後世のために、大学教育の改革にいましばらく取り組んでいきたいと念じております。有難うございました。